

宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』に登場する「にはとこのやぶ」と駄々っ子

石井竹夫

帝京平成大学薬学部
e-mail: t.ishii@thu.ac.jp

Elderberry Bush and Spoiled Child Appeared in “Night on the Milky Way Train” Written by Kenji Miyazawa

Takeo ISHII

Faculty of Pharmaceutical Sciences, Teikyo Heisei University

Keywords: ひば, 檜, 文学と植物のかかわり

前報で『銀河鉄道の夜』の主人公の二人を紹介した(石井, 2013)ので, 本稿では脇役の子供たちを紹介する。一人は氷山と衝突して沈没した船の乗客であったキリスト教徒の男の子タダシであり, もう一人はジョバンニと同級生のザネリである。二人とも水難事故に遭遇するという共通点を持つが, 特異なキャラクターが与えられている。タダシは駄々っ子として, ザネリはいじめっ子として物語に登場する。賢治は, 水難事故で死んでしまったのに現世の家へ帰りたいと駄々をこねるタダシが登場する場面にニワトコを, そしてジョバンニをいじめるザネリが登場する場面にヒバを配置して, 二人の人物と二つの植物が持つそれぞれの特異なキャラクターをうまくマッチングさせることに成功している。これらの植物の配置は絶妙であり, 特にニワトコに関しては相当手が込んでいる。

1. ニワトコの藪と駄々っ子

まずはニワトコが登場する場面である。

そしたら俄かにそこに, つやつやした黒い髪の毛の六つばかりの男の子が赤いジャケットのぼたんもかけずひどくびっくりしたやうな顔をしてがたがたふるへてはだしで立ってゐました。

(中略)

「ほくおほねえさんのところへ行くんだよう。」腰かけたばかりの男の子は顔を変にして燈台看守の向ふの席に座ったばかりの青年に云ひました。青年は何とも云へず悲しさうな顔をして, じっとその子の, ちぢれてむれた顔を見ました。女の子は, いきなり両手を顔にあててしくしく泣いてしまひました。

「お父さんやきくよねえさんはまだいろいろお

仕事があるのです。けれどももうすぐあとからいらっしゃいます。それよりも, おっかさんはどんなに永く待っていらっしゃったでせう。わたしの大事なタダシはいまどんな歌をうたつてゐるだらう, 雪の降る朝にみんなと手をつないでぐるぐるにはとこのやぶをまはつてあそんでゐるだらうかと考えたりほんたうに待って心配していらっしゃるんですから, 早く行つておっかさんにお目にかゝりませうね。」

(下線は著者)

これは, 「ジョバンニの切符」の章で, 銀河鉄道の列車にキリスト教徒の姉弟が乗ってくる場面である。タダシの家族は文章通りに記載すれば, お父さん, おっかさん, きくよねえさん(おほねえさん; 長女), かほる(=かほる子; 次女)そして末っ子のタダシ(姉から「たあちゃん」と呼ばれている)の5人である。母はすでに亡くなっている。家へ帰りたいと駄々をこねるタダシに対して, キリスト教徒である家庭教師の青年が「おっかさんがタダシがにはとこのやぶをまはつてあそんでゐるだらうかと考えたりして心配している」と言ってなだめている。「ぐるぐるニワトコの藪を回る」という遊びが西洋にあるのかどうか分からないが, ここではなぜニワトコが登場してくるのか考察してみる。

ニワトコ(スイカズラ科ニワトコ属; *Sambucus sieboldiana*)は山野に生える落葉低木で, よく枝分かれして高さ3~6mになる。葉は奇数羽状複葉で対生する(鈴木ら, 1995)。ニワトコは日本に現存する最古の和歌集『万葉集』や歴史書『古事記』では「山たづ」という名で出てくる(小島ら, 1971)。『古事記』の「山たづといふは, 今の造木(みやっこぎ)をいふ」の記述に由来し, 「ミヤッコギ」が「ミヤッコ」→「ミヤトコ」→「ニヤトコ」→「ニワトコ」に

転訛したものと推定されている。「山たづ」は『万葉集』では2首掲載されていて、いずれも「迎える」の枕詞（山たづ→迎える）である。ニワトコの葉は対生して、鳥の羽根のように向かい合っているように見えるので（第1図）、両腕を広げて人を「迎える」姿に似ている。『万葉集』の2首の一つは以下の通り（小島ら、1971）。



第1図. ニワトコ。（神奈川県大磯町高麗山で撮影）。

君が行（ゆ）き 日（け）長くなりぬ 山たづの
迎へを行（ゆ）かむ 待つには待たじ

『万葉集』巻2-90 衣通王（そとおりのおおきみ）
現代語訳（あなたの旅は日が重なった。迎えに行こうかとも待ってはられない。）

この歌の題詞には「古事記に軽太子（第十九代允恭天皇の第一皇太子；かるのひつぎのみこ）が同母妹とは知らずに軽太郎女（第二皇女；かるのおおいらつめ）と関係をもったので、伊予の湯（現在の松山市道後温泉）に流された。この時に衣通王（＝軽太郎女）が恋しさに耐えかねてその後を追って歌を歌った」とある。衣通王は、その美しさが衣を通して透けて見えるほどの美人であったことから。この歌は、「逢いたい」、「逢って思いきり抱きしめたい」という「魂（たましい）」の強烈な叫びを、ニワトコの葉の両腕を広げて「迎える」姿に重ねて表現している。

賢治は盛岡高等農林学校時代（現岩手大学農学部：1915 - 1918）に親友の保阪嘉内らと同人誌『アザリア』を創刊し、短歌を発表していたわけだから、物語創作時に有名なこの万葉集の歌も知っていたはずだ。教え子の伊藤清一による岩手国民高等学校開設時（1926.1.）の「講演筆記帳」によれば、賢治は「農民芸術」と題した講演の中で、「詩とは／われわれの魂の内奥から／ひとりで湧き出るところの／節奏することば、／斯くあり度い者（ママ）のである、／音響も節も調も語も独りでに來るのである、／万葉集は我吾国（ママ）の歌の先生である、／何時の世でも遂に万葉にかへるのである」と述べたという（下西、1998；原、1999）。賢治は『万葉集』から、詩を「魂」の

「内奥の叫び」と捉えていたようだ。「魂」は、「心」、「命」でもある。また、『万葉集』を「歌の先生」と言うほど影響を受けている。

家庭教師の青年は、駄々をこねるタダシに対して「たあちゃんは死んでしまったのだから現世には戻れない。駄々をこねるのは止めなさい」と直接的に言わないで、「タダシのことを大事（心から愛している）に思っているおっかさんのところへ行こう」と寄り添うような形で間接的に言う。タダシは母を失って寂しい思いをしてきたわけだから、無意識の中では母への思いが強いはずだ。もしも、母のタダシに対する強烈に逢いたいという気持ちがメタファーとしてのニワトコ（葉の姿が両腕を広げて待っているように見える）と一緒にタダシに伝われば、タダシは駄々をこねるのを止めるのではないか。すなわち、賢治は物語で、タダシの母の強烈に逢いたがっている気持ちをニワトコに重ねて表現しようとしている。

タダシという名は日本名である。ジョバンニやカムパネルラがイタリア名なのに、なぜ賢治はキリスト教徒の姉弟に日本名を付けたのか。ニワトコが「ミヤッコギ（造木）」から「ニワトコ」に転訛したものを考えると、タダシも「駄々っ子」の「子」を「座敷童子（ざしきわらし）」の「し」と読むことで、「ダダッコ」→「ダダッシ」→「タダシ」と転訛したと考えると納得するものがある。すなわち、駄々っ子のタダシである。

さらに、このニワトコの登場する場面が法華經思想と関係していることも見逃せない。この場面は法華七諭（ほっけしちゆ）の一つである「三車家宅」（『法華經』第三章「譬喩品」）に対応している。ある時、長者の邸宅が火事になった。中にいた子供たちは遊びに夢中になっていて火事に気付かず、長者が説得しても外に出ようとしなかった。そこで長者は子供たちが常日ごろから欲しがっていた玩具の「羊車、鹿車、牛車の三車が外にあるよ」といって子供たちを外へ導き出した（坂本・岩本、1976）。法華七諭とは、『法華經』に説かれている七つの「たとえ話」のことである。仏が「たとえ話」を用いて分かりやすく（？）万人を教化する方法が説かれている。「家宅」は苦しみ多い三界、「子供たち」は三界にいる衆生（万人）そして「長者」は仏である。『銀河鉄道の夜』では、「現世の家」が「家宅」、「タダシ」が「子供たち」そして「家庭教師の青年」が「長者」に対応する。賢治は暗に、煩惱具足の凡夫（駄々をこねるタダシ）を悟りに導くためにニワトコの藪を使って教化しようとしているように見える。「ぐるぐるニワトコの藪を回る」とは現世の衆生が悩み苦しんで藪の中をさ迷っている様子を現しているのであろう。ここでも、キリスト教徒に法華經思想を語らせている。賢治の引用文でのニワトコの採用および「タダシ」という命名は、物語を単なる

童話集の一つではなく思想書レベルまで押し上げているという点で最も成功した部類に入ると思う。

2. ヒバといじめっ子

ヒバは第四章の「ケンタウル祭の夜」に出てくる。

ジョバンニは、口笛を吹いてあるやうなさびしい口付きで、檜（ひのき）のまっ黒にならんだ町の坂を下りて来たのでした。

(中略)

いきなりひるまのザネリが、新しいえりの尖ったシャツを着て電燈の向ふ側の暗い小路（こうぢ）から出て来て、ひらっとジョバンニとすれちがひました。

「ザネリ、烏瓜ながしに行くの。」ジョバンニがまださう云ってしまはないうちに、「ジョバンニ、お父さんから、らっこの上着が来るよ。」その子が投げつけるやうにうしろから叫びました。

ジョバンニは、ぱっと胸がつめたくなり、そこから中きいんと鳴るやうに思ひました。

「何だい。ザネリ。」とジョバンニは高く叫び返しましたがもうザネリは向ふのひばの植わった家の中にはひってゐました。

「ザネリはどうしてぼくがなんにもしないのにあんなことを云ふのだらう。走るときはまるで鼠（ねずみ）のやうなくせに。ぼくがなんにもしないのにあんなことを云ふのはザネリがばかなからだ。」(下線は著者)

ザネリは、ジョバンニに対して「お父さんから、らっこの上着が来るよ。」と言ってからかう。ジョバンニの父は北方の海で海豹やらっこを密漁して投獄されている。ジョバンニは父不在と病気の母のため朝は新聞配達、放課後は活版所でアルバイトをして生計を助けている。疲れ果てていて授業も眠く満足に勉強も出来ていない。同級生の遊びの輪にも入れず、いじめの対象になっている。ザネリという名は、多分『銀河鉄道の夜』のお手本になったアミーチス作『クオレ』の登場人物である「ネッリ」に由来すると思われる。「ネッリ」は『クオレ』では、小さく弱よわしく病気で背が曲がっているのはいじめを受けている(アミーチス, 1992)。賢治がいじめを受けている「ネッリ」を、『銀河鉄道の夜』ではいじめ側の中心になっている「ザネリ」として登場させているのは面白い。ザネリはジョバンニをからかった後に「ひばの植わった家の中にはひってゐました」とあるが、なぜ「ひば」なのか。

ヒバはヒノキ科の常緑高木で、ネズコ属、アスナロ属の全ての変種を含めた総称とある(原, 1999)。しかし、植物図鑑によっては、ヒノキ科アスナロ

属の変種ヒノキアスナロ (*Thujaopsis dolabrata* var. *hondai*) のみをヒバと呼んでいる場合もある(鈴木ら, 1994)。ヒノキ(ヒノキ属; *Chamaecyparis obtusa*) の園芸種にチャボヒバやイトヒバと呼ばれるものがあったり、ヒノキ科クロベ属にニオイヒバ (*Thuja occidentalis*) があるなどヒノキとヒバは混用されている。賢治の生きた時代にヒバが植物図鑑でどのように分類されていたか分からないが、賢治が物語でヒノキとヒバを区別しているの「ひば」を特定してみたい。「ひば」を特定するには、「ひば」が出てくる文章のすぐ後の「走るときはまるで鼠(ねずみ)のやうなくせに」といっているのがヒントになると思う。材が鼠色に近いネズコ(別名はクロベあるいはゴロウヒバ、ネズコ属; *Thuja standishii*)、あるいは葉が尖っているの葉を鼠の通り道に置いて鼠を通れなくするのに使うネズ(別名はネズミサシ、ビャクシン属; *Juniperus rigida*) が候補に上がる。ネズコは材が黒みがかって美しく家具材、天井材、欄間などに用いられまた神代杉の模倣材として、時に庭園樹として植えられる(北村・岡本, 1959)。ネズも庭園樹に使うが、ビャクシン属である。しかし、引用文でザネリの着ているシャツの襟が「尖って」と記載されているので、葉先が尖っているネズも捨てがたい。賢治は物語ではネズコ(あるいはネズ)をヒバと呼んだのであろう。ネズコは陰樹で幼樹の耐陰性が強く湿気の多い処でも育つ。イメージ的にはネズコ=陰樹、材は鼠色=陰湿、鼠=ザネリとなる。物語を地形図と照らし合わせて見ると、ヒノキが高い所に生えていて、坂を下ったじめじめしたような所にザネリの家とヒバが植えられている。賢治はザネリの陰湿さを植物のネズコで表現したかったのかもしれない。

物語でザネリは船の上から「烏瓜のあかり」を流そうとして水に落ちるが、カンパネラに助けられる。しかし、カンパネラは落ちて行方不明になる。なぜ、物語でいじめっ子のザネリを助け、ジョバンニの気持ちを唯一理解できるカンパネラを死なせたのか。これは難解ではあるが、仏教思想にある命あるものは平等という「慈悲」の考えに従えば理解出来るのかもしれない。慈悲の心がなければ、ジョバンニやカンパネラに同情することはあっても、ザネリに同情することはない。

『銀河鉄道の夜』は賢治作の童話風にアレンジした現代語訳『法華経』(思想書あるいは法華経を普及させるための啓発書)であろう。しかし、賢治はそれを表に出そうとはしない。そればかりか、それを決して悟らせないようにしていると言っても過言ではない。多分、それが法華経思想の一番重要な所でもあると思われるからだ。私は植物を中心に読み解いているが、様々な切り口で読み解いていけば『法華経』のたとえ

話に類似の話あるいは法華経の中核思想（『銀河鉄道の夜』の「鳥捕り」は『法華経』の第二十章の「常不軽菩薩品」の常不軽菩薩に対応するなど）をたくさん見つけることが出来ると思う。

引用文献

- アミーチス, E. (矢崎源九朗訳). 1992. クオレー
愛の学校 (上). 偕成社. 東京.
原 子朗. 1999. 新宮沢賢治語彙辞典. 東京書籍. 東京.
石井竹夫. 2013. 宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』に登場するイチョウと二人の男の子. 人植関係学誌. 12(2):29-32.
小島憲之・木下正俊・佐竹昭広 (校注・訳). 1971. 萬葉集一. 小学館. 東京.

- 北村四郎・岡本省吾. 1959. 原色日本樹目図鑑. 保育社. 東大阪.
下西善三郎. 1998. 賢治と『万葉集』 - 宮沢賢治における万葉受容をめぐって -. 金沢大学国語国文 23:220-228.
坂本幸男・岩本 裕 (訳). 1976. 文庫版法華経 (全3冊). 岩波書店. 東京.
鈴木庸夫 (写真)・畔上能力・菱山中三郎・鳥居恒夫・西田尚道・新井二郎・石井英実 (解説). 1994. 山溪ポケット図鑑 秋の花. 山と溪谷社. 東京.
鈴木庸夫 (写真)・畔上能力・菱山中三郎・鳥居恒夫・西田尚道・新井二郎・石井英実 (解説). 1995. 山溪ポケット図鑑 春の花. 山と溪谷社. 東京.